

Global Classrooms

グローバル・クラスルーム 報告書

高校模擬国連国際大会への第5回日本代表団派遣支援事業



2011年6月
グローバル・クラスルーム日本委員会
Japan Committee for Global Classrooms

【後援】

文部科学省
外務省
経済産業省
国際連合大学
国際連合広報センター
財団法人日本国際連合協会

【協賛】



メリルリンチ日本証券株式会社

目次

はじめに	2
グローバル・クラスルームとは	3
日本模擬国連とは	4
企画概要	5
受賞	10
参加者報告	11
支援協力団体一覧	26
会計報告	26
メリルリンチ日本証券より	27
グローバル・クラスルーム日本委員会	28
おわりに	29
参考	30

はじめに

この度、国際高校模擬国連大会への5回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業にご協賛いただいたメリルリンチ日本証券様をはじめ、ご後援いただいた関係省庁・団体等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業では、2010年11月13・14日に東京の国連大学で行われた第4回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた5校10名の高校生が、日本代表団として国際大会に参加いたしました。今回は4校がモンテネグロの大天使として1校がイギリス大使として、世界24カ国、総勢約2500名の参加者の中に飛び込み、10名が10通りのやり方で会議に挑みました。

本報告書で大部分を占めているのは日本代表団10名の高校生の報告です。10名の高校生がアメリカ・ニューヨークでそれぞれが担当する会議の議場において感じたことが全て記されています。会議前、会議中、そして、これから将来に向けての各人の様々な思いが読み取れる内容です。その思いが今後のそれぞれの活動に少しでも刺激を与えるものとなるのであれば、私どもとしてこれ以上の喜びはありません。

最後に、本書が多くの人々に読まれ、日本における高校模擬国連活動の更なる普及と発展の一助になることを、そして、これから国際舞台に関わろうとする多くの人の活力につながることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いします。

グローバル・クラスルーム日本委員会
2011年度 理事長 杉村 詠史

グローバル・クラスルームは、国連会議のミュレーション（模擬国連）を通じて、現代の世界におけるさまざまな課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する学生は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、国連の手続規則を駆使して、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国国連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。

日本でも、大学生の模擬国連は 20 年以上の歴史があり、毎年模擬国連会議全日本大会が開催されています。そして 2007 年、かねてより若年層に対して国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識の普及活動をグローバルに行ってきましたメリルリンチ社をスポンサーに迎えグローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第一回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。

グローバル・クラスルーム日本委員会
Japan Committee for Global Classrooms

グローバル・クラスルームとは

日本模擬国連（Japan Model United Nations: JMUN）は、日本で始めて組織化された模擬国連活動を行う団体です。

1983年上智大学において、当時上智大学教授だった緒方貞子（国際協力機構理事長／元国連難民高等弁務官）の顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を前身としています。当初は毎年ニューヨークで開催されている模擬国連会議全米大会（National Model United Nations Conference）への日本代表団の派遣を中心に活動を行っていましたが、委員会の規模拡大に伴い、日本における模擬国連活動を本格化させ、名称を模擬国連委員会に改名しました。また、2010年から、模擬国連委員会は、名称を改めまして日本模擬国連となりました。

日本模擬国連は、模擬国連会議などの学習を通じて国際社会に貢献する人材を育成することを使命としています。日本模擬国連は国際社会を考える一つの方法であると同時に、価値観や国籍の壁を越えて人と人とをつなぐネットワークでもあります。また、国際社会に貢献できるたくさんの人材を育成・輩出し、当委員会の活動に参加していた先輩たちは、さまざまな省庁や国際機関、民間企業、非政府組織、学術機関など多分野に渡って国際社会に貢献する活躍をしています。

日本模擬国連とは

日本模擬国連
Japan Model United Nations

企画概要

企画名称

2011 年度高校模擬国連国際大会への日本代表団派遣支援事業

期日

2011 年 5 月 10 日（火）～16 日（月）

開催場所

米国ニューヨーク市

主催団体

グローバル・クラスルーム日本委員会

内容

5 月中旬に米国国連協会の主催により開催される高校模擬国連国際大会 (12th Annual Global Classrooms International Model UN Conference) に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第四回全日本高校模擬国連大会 (Global Classrooms in Japan 2010) にて選出した高校生が日本代表団として参加することへの支援。同大会には米国国内の 21 都市を含む世界 24 か国から総勢約 2500 名の高校生が参加した。

代表団構成

1) 高校生 (10 名 : 次の 5 校より各 2 名)

- ・桐蔭学園中等教育学校
- ・麻布高等学校
- ・香川誠陵高等学校
- ・渋谷教育学園幕張高等学校
- ・灘高等学校

2) 引率者 (7 名)

- ・上記 5 校より教諭各 1 名の計 5 名
- ・グローバル・クラスルーム日本委員会より 2 名

派遣報告

派遣日程

- 4月24日（日） インフォメーション・セッション
- 5月10日（火） NY到着
国際連合中満泉部長
事務所訪問
夕食会
- 5月11日（水） 国連日本政府代表部訪問
現地高校訪問
- 5月12日（木） 模擬国連会議開会式
- 5月13日（金） 模擬国連会議1日目
- 5月14日（土） 模擬国連会議2日目
閉会式
- 5月15日（日） NY出発
- 5月16日（月） 日本帰国

参加会議

高校	担当会議	議題
桐蔭学園中等教育学校 <United Kingdom>	Historical Security Council 1992	Situation in Haiti
麻布高等学校 <Montenegro>	General Assembly First Committee	Role of Science and Technology in the context of International Security and Disarmament
香川誠陵高等学校 <Montenegro>	World Health Organization	Maternal Health
渋谷教育学園幕張高等学校 <Montenegro>	UN Forum for Forests	Sustainable Forest Management in the 21st Century
灘高等学校 <Montenegro>	UN Conference on Sport for Peace and Development	Long Term Implementation of the Magglingen Call to Action



Global Classrooms

4月24日

【インフォメーション・セッション】

メリルリンチ日本証券のオフィスの一室にて、渡米前の説明会および研究発表会を行いました。評議員による激励の言葉を受け、国際大会に向けて生徒たちも決意を新たにしました。

研究発表会では、会議ごとに設定されている議題について自分たちの担当国の政策を英語で発表しました。生徒たちによる英語での発表、それに対するフィードバックを通して担当会議・議題の理解を深めてもらいました。

また、国際大会に参加した際の戸惑いを少しでも少なくすることと会議の経験を増やすために昨年から行われている練習会議を今年も実施しました。その際には過去の国際大会派遣生も集まりました。様々なアドバイスを受け、派遣団にとっては貴重な時間となりました。



1st Day

【日本出発・ニューヨーク到着】

成田国際空港からニューヨークのジョン・F・ケネディ国際空港へ向けて出発しました。当初は緊張した面持ちであったものの、しばらくすると打ち解け、リラックスした様子で出発しました。

ニューヨーク到着後はしばらく自由時間となりました。各生徒はニューヨークの街並みを歩いてその空気に触れ、ニューヨークに来たことを実感していました。



【国連中満部長事務所訪問】

国連平和維持活動局政策・評価・訓練部長の中満泉様の事務所を訪問しました。実際に国連の場で働いている方のお話を伺い、国際社会に対する認識を深めるとともに、国連に対する興味がより一層強まりました。



【夕食会】

この日の夜は、Grand Hyatt 近くのレストランで壮行会を行いました。高校生たちはニューヨークに到着した興奮も冷めやらぬまま、食事を楽しんでいました。

Global Classrooms

2nd Day

【国連日本政府代表部訪問】

午前は、国連日本政府代表部を表敬訪問しました。次席大使の兒玉大使から、国連における日本の取り組みについてのお話や模擬国連会議に向けた激励のお言葉をいただきました。質疑応答では国連での仕事内容や働くきっかけのみならず、会議の議題に関する質問などもありました。各生徒は国連を身近に感じることができ、大使としての姿を学び、会議に向けて緊張感を高めっていました。



【現地高校訪問】

午後は、国際大会の主催者である UNA-USA の紹介で、現地の高校を訪問しました。今年度は Brooklyn の High School for Enterprise, Business, and Technology に赴き、お土産の交換や同校の授業の見学、ディベートを行い、英語が得意な生徒はもちろん、得意でない生徒も積極的にコミュニケーションをとっていました。



3rd Day

【潘基文国連事務総長表敬訪問】

開会式に先立ち、震災に見舞われた日本を心配してくださっていた潘基文国連事務総長を表敬訪問しました。事務総長より日本語でお見舞いのお言葉をいただき、代表団全員身を引き締めていました。



【開会式】

各国から集まった大勢の参加者が国連本部の総会本議場に集いました。世界中から集まった模擬国連大会の参加者の数と、議場の雰囲気は圧倒的でした。本物の決議が作られる場に今いると緊張感から、改めて会議に参加する自覚が高まり、また潘基文国連事務総長の講演を聞き、次の日の会議への期待と意気込みが高まりました。

Global Classrooms

4th Day**【模擬国連会議 1 日目】**

模擬国連会議が滞在先の Grand Hyatt Hotel で行われました。200 人以上が集まる会議や少人数の会議など参加する会議の規模は様々でしたが、全チームがそれぞれの主張をスピーチや交渉の場において積極的にアピールしていました。

**5th Day****【模擬国連会議 2 日目】**

2 日目も Grand Hyatt Hotel で会議が行われました。高校生たちは、夜ほとんど寝ずに、前日の反省を踏まえて方針を練り直し、会議に臨んでいました。1 日目で会議戦略が崩れ途方に暮れていた高校生もいましたが、全員最後まであきらめずに、自国の主張を粘り強くさまざまな国の大天使に伝え、交渉していました。

【閉会式】

会議終了後すぐに、開会式と同様、国連本部にある国連総会本会議場で閉会式が行われました。そこで、Honorable Mention 受賞が発表されました。会議を無事に終えることができた達成感、安堵感とともに、自分の力を出し切れなかったと感じた悔しさで、思わず涙する生徒もいました。

6th- 7th Day**【ニューヨーク出発・日本帰国】**

長くも短くも感じた全日程を終え、ジョン・F・ケネディ国際空港を出発し日本に帰国しました。高校生は名残惜しさを感じながら、それぞれの感情を胸の中に、帰路につきました。



Global Classrooms

2nd Day

【国連日本政府代表部訪問】

午前は、国連日本政府代表部を表敬訪問しました。次席大使の兒玉大使から、国連における日本の取り組みについてのお話や模擬国連会議に向けた激励のお言葉をいただきました。質疑応答では国連での仕事内容や働くきっかけのみならず、会議の議題に関する質問などもありました。各生徒は国連を身近に感じることができ、大使としての姿を学び、会議に向けて緊張感を高めっていました。



【現地高校訪問】

午後は、国際大会の主催者である UNA-USA の紹介で、現地の高校を訪問しました。今年度は Brooklyn の High School for Enterprise, Business, and Technology に赴き、お土産の交換や同校の授業の見学、ディベートを行い、英語が得意な生徒はもちろん、得意でない生徒も積極的にコミュニケーションをとっていました。

3rd Day

【潘基文国連事務総長表敬訪問】

開会式に先立ち、震災に見舞われた日本を心配してくださっていた潘基文国連事務総長を表敬訪問しました。事務総長より日本語でお見舞いのお言葉をいただき、代表団全員身を引き締めていました。



【開会式】

各国から集まった大勢の参加者が国連本部の総会本議場に集いました。世界中から集まった模擬国連大会の参加者の数と、議場の雰囲気は圧倒的でした。本物の決議が作られる場に今いふると緊張感から、改めて会議に参加する自覚が高まり、また潘基文国連事務総長の講演を聞き、次の日の会議への期待と意気込みが高まりました。

Global Classrooms

4th Day

【模擬国連会議 1 日目】

模擬国連会議が滞在先の Grand Hyatt Hotel で行われました。200 人以上が集まる会議や少人数の会議など参加する会議の規模は様々でしたが、全チームがそれぞれの主張をスピーチや交渉の場において積極的にアピールしていました。



5th Day

【模擬国連会議 2 日目】

2 日目も Grand Hyatt Hotel で会議が行われました。高校生たちは、夜ほとんど寝ずに、前日の反省を踏まえて方針を練り直し、会議に臨んでいました。1 日目で会議戦略が崩れ途方に暮れていた高校生もいましたが、全員最後まであきらめずに、自国の主張を粘り強くさまざまな国の大天使に伝え、交渉していました。

【閉会式】

会議終了後すぐに、開会式と同様、国連本部にある国連総会本会議場で閉会式が行われました。そこで、Honorable Mention 受賞が発表されました。会議を無事に終えることができた達成感、安堵感とともに、自分の力を出し切れなかつたと感じた悔しさで、思わず涙する生徒もいました。

6th- 7th Day

【ニューヨーク出発・日本帰国】

長くも短くも感じた全日程を終え、ジョン・F・ケネディ国際空港を出発し日本に帰国しました。高校生は名残惜しさを感じながら、それぞれの感情を胸の中に、帰路につきました。



Global Classrooms

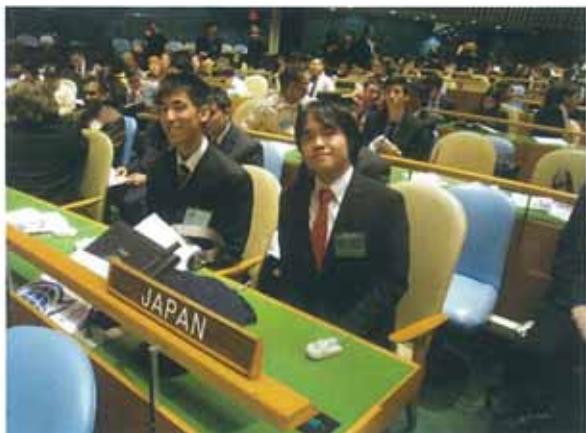
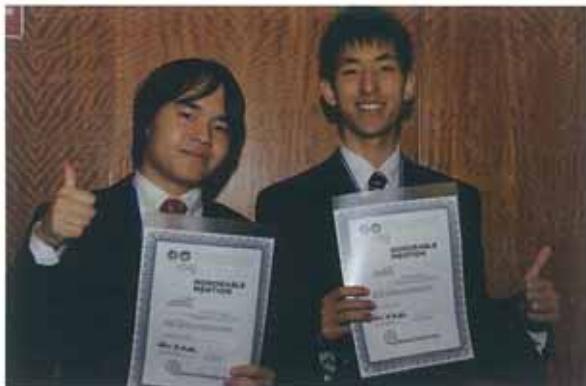
受賞

【Honorable Mention 賞】

Montenegro

麻布高等学校

General Assembly 1st Committee



大内 悠路

慶應義塾大学経済学部経済学科 2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 理事長補佐

初めに、今回の派遣支援事業にご協賛いただいたメリルリンチ日本証券様、ご後援いただいた諸団体の皆様に、厚く御礼申し上げます。派遣支援事業にあたって、多くの方々のご支援、ご指導がなければ実施することはできなかったことを改めて認識するとともに、深く感謝いたします。

今回の派遣支援事業は、当委員会理事長補佐の私、大内悠路がアドバイザーとして、研究の高橋が会議スタッフとして派遣団に同行させていただきました。

私は、高校模擬国連に対して希望を持っています。高校生の模擬国連は、非常に自由です。ある議題に対して現実にとらわれることなく、自由な発想でそれぞれの議題の解決策を考えます。それは確かに、現実的に不可能であったり、論理的に間違っていたりすることも多くあります。しかし中には、もしかすると現実にその議題を解決できる案があるかもしれませんのです。現実の国連には、さまざまな政治的なしがらみがあり、大使の立場もあり、自由に発想することは難しいでしょう。もちろんそれを踏まえた上で政策立案をすることが最も現実に沿っているのですが、いつかそのような現実さえも払拭できるような決議が模擬国連から出ることを私は望んでおり、そのような会議を作れることを夢見て、このグローバル・クラスルーム日本委員会の運営に携わっております。

その私の夢は、このたびの国際大会派遣を経て実現可能性を帯びてきたように思えます。それは、今まで私がやっていた模擬国連での議論が日本独特のやり方であったということを再認識したからです。

高校生の自由な発想に基づく決議と、日本独特的模擬国連との関連性については、若干の説明を要します。以下、この派遣支援事業の報告として、日本と外国の模擬国連の違いについて感じたことを述べながら、説明することにします。

参加者報告

Global Classrooms

「日本人は協調性が強い民族だ。」とよく言われますが、今回の国際大会の場ほどそれを痛感したことはありません。全員が自国の主張をし、妥協したほうが負け、といった交渉がどの会議でも当たり前に行われていましたし、議長もいかに自国の主張を押し通せたかという点を高く評価していました。もちろん、日本の模擬国連においても、自国の主張を通すことで評価はされますが、それのみならず、まとめる力ということも大きな評価対象です。私が見たところ、今期の代表団が最も大会中に苦しんだのはその評価対象のギャップでした。

一日目の会議が終わった後、満足な大使行動ができた、と言っている派遣生は誰もおらず、全員が口をそろえて私に言ってきました——「皆が私たちの主張を聞かず、自国の主張ばかりする」「現実的ではない政策を推している」。私はそれを聞いて、大変興味深く感じました。世界中から集まった高校生は、日本の高校生とは違い、自国の政策を譲る気はなく、絶対の自信を持ってその会議に臨んでいるのだと分かったからです。全日本大会を見ていて、日本の高校生は、自国の政策に自信を持っているのはもちろんのですが、それでも妥協すべき「のりしろ」を残しています。考えているのは、何とか自国の主張を国際的に、現実的に受け入れられるものにしよう、ということです。しかし、国際大会では、自国の主張が絶対正しい、だから全員にそれを広めようという、妥協の余地が一切ない参加者が大部分だったのです。派遣生たちは、一日目にそのことに気づき、夜通じて自国の主張を変え、二日目に何とか持ち直そうと努力しましたが、それでも絶対的な自信を持って主張してくる世界の高校生に伝えるにはすでに遅すぎたようでした。

結果として、派遣生の何人かは満足のいく会議行動ができなかったと感じたようです。ただ私は、それが彼らの政策が間違っていたからだとは微塵も思いません。彼らの政策は正しかった。ただ、それを自信を持って主張して、断固として譲らないという姿勢が、他国の大天使と比べて弱かったことなのだと思います。

私が夢見る理想的な決議とは、おそらく各大使が自信を持って主張し、そうして議論を精一杯ぶつけ合った結果に生まれるものだと思って

います。その点では国際大会における模擬国連は非常に有意義なものだと思いました。しかし結果として、極めて非現実的な決議を作り上げてしまいがちです。それは、妥協がないからです。先ほどから妥協することに対して少し批判的であるかのような書きぶりをしているかもしれません、妥協とは素晴らしいものだと私は考えています。ただしそれは、「精一杯主張をぶつけ合った上での妥協」です。この妥協がなければ、模擬国連会議で作られた決議は、つまりのないものになってしまいます。議論を極限まで戦わせた結果の妥協によってのみ、素晴らしい決議は作られるのです。お互いの主張を理解し、妥協するという点においては、派遣生は素晴らしい能力を持っていたと私は思いますしかし、国際大会の場で評価されるということでは、そのカードを切るのが早すぎたのです。

今回の派遣生は、自国の主張と妥協を同じくらいの配分で含んだ政策をもっていたように思います。逆に、国際大会に参加した世界の高校生は妥協を一切持ち合わせていませんでした。世界の高校生が日本の模擬国連大会に参加したらどうなるのだろう、という興味すらわいてくるほどその姿勢は異なっていました。先ほども述べたとおり、私たちは日本人という民族であり、協調性を重視します。しかしその殻に閉じこもってしまっては、世界を開くような考えを作ることはできないでしょう。世界の模擬国連日本の模擬国連、それぞれの文化を学びあってこそ、理想的な決議を作ることができる会議になるのではないかでしょうか。その結論を得たという意味でも、派遣支援事業には大変大きな価値がありました。世界の文化を学ぶことによって、日本の模擬国連をさらに発展させ、私の「夢の決議」を実現するべく、これからも努めまいりたいと思っています。

Global Classrooms

小畠 一真

桐蔭学園中等教育学校 3年

"I need your global vision as a young leader. Try to have a global vision for the future of yourself and for the future of all the people. Let's work together to make a better world for all."

これは、我々が潘基文国連事務総長を表敬訪問した際にいただいたメッセージです。事務総長はにこやかに笑みを浮かべながら、私達若い世代に熱い期待を寄せて下さいました。かねてから、将来国際社会で活躍できるような人材になりたいと考えていた私はこの言葉を聞いて、一層その思いを強くしました。

今回私達のペアはイギリス大使として、安全保障理事会の会議 “Historical Security Council: Situation in Haiti 1992” に参加しました。

この会議は既に起きた国際的な事件（ここではハイチの軍事クーデター）について現代に生きる私達の視点から問題を捉え直してそれぞれの国の立場で最善策を講じるもので、その当時の世界情勢を踏まえて過去に遡って議論する点が大きな特徴です。

また、Crisis Situation と呼ばれる緊急事態が会議の最中に度々織り込まれ、その状況に合わせて各国大使は瞬時に判断をすることが求められます。例えば、今回の会議では‘米ロの両海軍がハイチに上陸、2か国が対立状態に入る’や‘ハイチの軍事政権が鎖国を宣言する’などの情報が流され、議論の方向性を保つのが大変でした。

我々イギリスは迅速な問題解決の為、また「ならず者国家としてのハイチ」を放置するわけにはいかないという考え方から、①軍事政権を追い出す為の多国籍軍の結成 ②国連監視下での大統領選挙 ③ハイチ警察の再編成計画 (LETIH PLAN: Law Enforcement Training in Haiti) を提案しました。

会議初日は各自が口々に言いたい放題の意見を出すばかりで一向にまとまりず、二日目の会議開始直後に「議論されるべき問題に優先順位をつけ、それに従って議論をしていこう」と私が呼びかけ、ようやく話し合いが進んで最後に

はイギリスの支持した決議案の一つが可決されました。

私はこれまで会議というものは参加者が一つのテーブルを囲んで行うものだと考えていましたが、今回の会議では、全くテーブルに着こうとしない人や壁に向かって話をする人、さらには自分で勝手に別のテーブルを持ち込んでくる人など、さまざまなタイプの人人がいて、もしかしたらこれが現実の国際社会の縮図であるかも知れないとも思いました。

私は学校の模擬国連部に所属し、練習会議を通じて主張の異なるそれぞれの立場を経験することで物事を多角的に考える練習を積み重ねてきました。

さらに、国際ユース会議に参加する機会にも恵まれ、各国からの参加者との意見交換を通じて、互いの主張を理解し合いながらも自分の意見を主張することの大切さと難しさを痛感しています。

現在、世界の中で日本は「意思表示を明確にしない国」とみなされ、国際社会から取り残されているように思います。日本が世界をリードする先進国として存在感を示すには、もっと自国の意見をはっきりと強く主張しなければなりません。周りの国々の出方を待ったり顔色を覗ったりしない、逞しい外交姿勢が必要なのです。

これからは、多くの問題を抱える今日の世界において、未来を担う私達の世代が互いを理解する努力を続け、解決に向けてのコモンゴールを見出すことが不可欠であると私は強く思います。

“A better world for all” の実現の為に。



Global Classrooms

立花 裕太郎

桐蔭学園中等教育学校 3年

2年前の私からすれば、今こうして高校模擬国連国際大会を終えて、そのレポートを書いているなんて想像もできなかったことです。学校の模擬国連部入部や全日本大会出場は先生と親友でありパートナーの小畠君の勧めがなければ有り得ませんでした。もともと、美術部に所属していて、英語でも日本語でも人前で話すことが昔から得意でなかったからです。それを経て今回、高校模擬国連国際大会に参加し、さまざまな貴重な体験をして、派遣団のメンバーに出会えたことは、本当に感無量です。

中満さんの事務所訪問と日本政府代表部訪問では国連の場で実際に活躍されているお二方にお会いすることができました。中満さんの訪問は第五委員会に参加するために予定が変更になり、兒玉大使を訪問したときも国連から帰られた直後であったこと、そのことがかえって常に移り変わっていく国際情勢を実感させました。中満さんが高校時代にマザー・テレサの影響を受けたのをきっかけに国連で働きたいと思い、実際に今、国連で活躍されているのが印象的でした。また、兒玉大使のお話からは日本に対する熱い思いがひしひしと伝わってきました。兒玉大使は、日本をアメリカという外から見ているからこそ、日本の姿がはっきり見え、的確な政策を打ち出せるのだと思いました。

潘基文事務総長が派遣団全員と特別に会ってくださった時に、韓国語でもなく、英語でもなく、私たちの母国語である日本語で語りかけてくださったことが被災された東北の方々に対する深い思いやりであると感じました。そして、事務総長に対して感謝の言葉を述べたのが私のパートナーであったことを誇りに思います。

会議を振り返ってみると、初日は私達の会議だけの特色であった crisis situation に私たち自身が対応しきれていなかったと思います。しかし、他の生徒たちが crisis situation のせいで論点を見失い、グループごと、グループ内の話し合いの内容がバラバラになったのも会議をやりにくくした一つの要因でした。Crisis situation は実際に安全保障理事会で体験するような、刻々と時間が経過するごとに局面や事件に対処する能力を求めるもので、会議の難易度を大幅に上げる一方で、会議をより興味深い

ものにしました。二日目は前日の反省を生かして、初日の夜、引率の先生方と考えた作戦がおおむね上手く行きました。二日間を通してアメリカ人の生徒たちの積極性と反駁の時の切返しの速さには驚きました。すべきことはし尽くしたという達成感がある反面、もう一度会議をやりたいという気持ちがあります。

もし、私が受験勉強だけをしている高校三年生であったら、何のために受験勉強をするか、何のために大学で勉強をするのか解らなかつたかもしれません、今回まさに NY への派遣を通じて、将来、あのような場にもう一度に行きたいからこそ勉強をするのだと感じました。グローバルな知識を習得し、母国語が英語の人たちと対等に会話ができるような能力を身に着けていきたいと強く感じました。

また、派遣団のみんなは個性的で、英語はもちろんの事、母国語である日本語もきちんと使って、主張することに対して自信を持っていて、素晴らしいメンバーでした。

今回、いろいろな人たちと接し、また様々な体験を通して、私の将来の方向性を明確にすることができました。今回の派遣は私にとって、欠けがえのないものとなりました。



Global Classrooms

山田 寛久

麻布高等学校 3 年

まず何よりも、今回の渡米でお世話になった方々に御礼を申し上げねばなりません。引率の大学生の皆さま、野田さんを含めたメリルリンクの皆さま、教員の皆さま、派遣生のみんななど、本当にたくさんの人々に支えられました。ありがとうございました。

今回の会議を振り返ると、政策面や、議題に関するもちろん非常に勉強になりましたが、それに加えて、外国人との渡り合いかたを学べた気がします。児玉大使に伺ったお話を聞いて、「私たちは常に他流試合をしなければならない。『日本流』で通用するとは限らず、『世界流』をも身につける必要がある」というものがありましたが、それを痛感させられる会議となりました。

会議一日目の午前中はうまくグループの中心に立ち、決議案の土台作りを進めていく事ができましたが、午後以降、この決議案を持ったトルコ大使がグループを離れ、僕らがかき集めた十数のスポンサーとシグナトリーをひっさげ、他グループと交渉に行ってしました。トルコが他グループと交渉を重ねた末の決議案は、僕らが当初想定していたものとはかけ離れたものになっており、トルコに有利な内容となっていました。今考えてみれば、トルコの国益を最大にする当然の会議行動だったわけですが、僕からしてみれば、僕らの努力がそっくりそのまま奪われたように感じ、かなり落ち込んでしまいました。その日の午後のバディスクールとの交流もサボって寝込んでしまったほど、と言えば、どれだけ落ち込んでいたかが伝わるでしょうか。

“世界流”的洗礼を受け、二日目には吹っ切れる決意ができていました。手元にあった決議案は、当初全く想定していなかった内容のものでしたが、これで乗り切るしかない、と覚悟を決めました。振り返ってみれば、二日目の僕の会議中の態度は積極的なあまり、多少傲慢であったようにも思えますが、結果的には、それが“世界流”であったということなのでしょう。また、パートナーと当初打ち合わせており、彼

がスポンサーの国々の心が離れないようにひきつけておいてくれたので、安心して暴れられたというのもあります。

結果的に僕らは優秀賞を頂く事ができましたが、上述したような事情から、僕らの決議案には、当初パートナーと二人で綿密に組み上げたロジックの微塵も載っていないかった上に、内容に矛盾があるとして、最終的には議長裁量で却下されてしまいました。会議行動の何に重きを置くかによって評価は変わってきますが、僕らが本物のモンテネグロ大使だったら最悪の結果と言わざるをえません。

それでも僕らが受賞できたのは、この賞というやつがなかなかに曲者であるからに他なりません。判定基準が正確には明かされていませんし、会場には 200 人余りの大使がいます。完全に正確な判定など不可能ですし、賞を目指した会議行動と国益を尊重した会議行動には若干のズレがあるようすら思えます。勝ち負けを決める競技としての模擬国連に限界を感じましたし、ある種の理不尽さすら覚えました。

僕らの受賞は政策の完成度よりも、交渉力を評価されての事です。悪く言ってしまえば、中身はあまりないけれど、外見が評価された、といったところでしょうか。模擬国連という活動の本質は現実世界で通用する政策を作る事にあるので、これが伴わなかったのは非常に残念ですし、大きな反省点です。今後、僕は麻布の後輩の育成に注力する事になりますが、彼らには、政策と交渉力の両面からの評価を目指してほしいと思いますし、彼らにはそのポテンシャルが十分にあると思います。

最後になりますが、この事を書かずに終わる事はできません。ここまで 2 ページ弱だらだと書いてきて、一番大事な事に一段落しか割かないのもなんですが、他の派遣生の事です。模擬国連がなかったら出会うこともなかったであろう、全国から集まつた 10 人の非常に優秀な仲間達と、一週間共同生活を送り、固い友情をはぐくめたことは、誇張などではなく、本当に、本当に、一生の財産になると思っています。みな個性的で面白く、十人十色とはこの事を言うんだなあ、と一人で納得しています。

Global Classrooms

刀禰 亮哉

麻布高等学校 3年

模擬国連を、一つの競技として定義するならば、模擬国連は、自由度の高い競技だ。その自由度故に、人の性格・思考が行動に色濃く反映される。共存、競合、裏切り…国連が人間社会の縮図であるのならば、国連の縮図である模擬国連も同様に人間社会の縮図であると言えるだろう。

模擬国連においては、「自己」を強く認識することが、勝ちへの第一歩である。勝ちにいくのならば、自らの主張について事前にパートナーとお互いに納得するまで話し合って、厳密なロジックを組み立てていくことは必要不可欠だ。自分の主張に矛盾や自己満足を感じてしまっては、それを堂々と主張することは（少なくとも私には）できない。そしてこれは、我々が現実に今生きている社会でも全く同様のことと言えると私は考える。

近年、自分を見失う若者が多いという話を良く耳にする。専門家ではないが、これはどうやら日本に限らず、世界的な傾向であるようだ。薬物中毒・異常犯罪の増加はその結果の一端であるし、特定の主義主張への狂信も、何か大きな存在に縋りつきたいという若者の必死の叫びであるように思える。

このようなことが起きてしまうのは、決して若者のみの責任ではない。好き放題にやっておいて、生じた問題は未来の世代へ投げるという大人の責任もあるし、社会全体の責任もあるといえる。しかし責任の所在を追及することは、今回の私の本旨ではない。私が言いたいのは、どのようにすれば「自己」をしっかりと持てるか、という所ただ一点である。

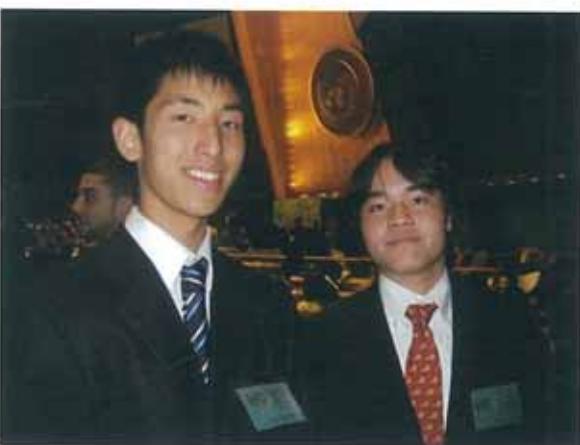
「自己」を確立できない要因には教育や生活環境など様々なものがあるが、そのどれにおいても共通するのは、「目的」の欠陥である。模擬国連大会においては、まず自分の「ボトムライン」（最低限守り通したいライン）を定め、そして逆に最高のパターンは何なのか、ということを考える。ボトムラインを守れなければ討ち死にであるし、最高のパターンに入れば、至福の時間が訪れる。しかし、討ち死にであろうと至福であろうと、やはり目的意識をきちんと持っている、という点を私は強調したい。

あくまで貪欲になること、そして失敗を恐れず己を貫き通すこと、これが自分を見失う若者達に必要な姿勢であると私は考える。しかしこの姿勢は、すぐに形成されるものでないことは私も重々承知である。そこで模擬国連の登場だ。

模擬国連は、「主張する」ということの喜び楽しみを我々に教えてくれる。そして何よりもこれから的人生において大きな宝となる仲間達を得ることができる。仲間たちがいれば、今後自分を見失うこともなくなるであろう。この模擬国連という素晴らしい企画が、今後未来の世代の日本、そして世界の学生によって引き続き行われることこそが、人類社会の明るい未来のも繋がっていくのではないだろうか。

模擬国連では若者が活き活きと議論を交わしている。

そしてその模擬国連は、明るい未来の世界の縮図なのだ。



Global Classrooms

小野 真嗣

香川誠陵高等学校 3年

私は、日本で生まれ、日本で育ち、今を生きている。世界という大きな集合の中の、日本という小さな国で生活している。その中で本当の世界を感じることなどできるだろうか？テレビやネットでは世界各地の情報を見ることができる。しかし、実際に体験してみることは日本を飛び出さない限りできない。そういう理解はあった。しかし、だからと言って行動を起こしていたわけではなかった。海外に行ったことがなかったため、模擬国連と出会うまでは、心のどこかで世界のことが「遠すぎて自分には関係のないもの」と、分けて考えていた。

模擬国連活動を最初に知ったのは9月の中頃だった。ペアの子から勧誘を受け、締め切りが迫っている予選の課題を慌てて書いた。その時点で模擬国連について調べたものの、今までそういう活動などには全く参加したことのない私にとっては具体的に想像することはできなかつた。ただただ、「何かすごい大会に参加するのだ」という漠然とした感覚だった。その感覚の中でリサーチをし、資料を読み漁る。すると、今まで自分が世界をどれだけいいかげんに見つめ、考えていたかを思い知った。自分の知識は上辺だけで大事なところを何も捉えていなかつた。自分で考えるという能動的な部分がなかつたのだ。そのことに気付かせててくれたのは、模擬国連において担当国のリサーチすることだった。自分の担当国は何を求めているのか。何を守らなければならないのかを考える。日ごろは考えもしないようなところまで熟考するのだ。そして、全日本大会では自国の国益を追求し、時には他国と激しく対立する。このとき印象的だったのは「小国はあまり発言しない」という消極的な部分がなかつたことだ。小国だろうが大国だろうが「模擬」なのだから積極的に発言していく。これもまた醍醐味の1つのではないだろうか。自分の担当国を自分の戦略で攻める。相手もまた攻めてくる。その中でDRをまとめることの難しさ。国家間におけるさまざまな駆け引きがあり、容易に妥協できないのだ。これは、外交官がなかなか交渉を進められないと同じであるように思えた。

今回 NY 大会でまず体感したのは、さまざま国籍の人々がいる会場に身を置いたときのかつて感じたことのないほどの緊張感と高揚感である。この会場がまるで世界の縮図のように感じられ、自分が日本人であり、会場の一部を作り上げているのだと感じた。それは、世界においても同じだろう。規模は違えど、自分が世界の一部であること、それを確認できた瞬間だった。さらに、印象を深めたのが Opening Ceremony での潘基文国連事務総長の言葉である。彼のセリフの中に地球市民と言う言葉があった。自分たちは国民であると同時に地球の市民であり、世界の市民もある。これは今まで世界が遠いものと思っていた自分にとって、自分と世界を結びつけるきっかけとなった。

模擬国連は、今まで見るだけだった世界を、実際に体験することができる。他にも模擬国連は人との繋がりや、国益の難しさなど非常に見にくい部分をリアルに体感できる楽しさがある。準備はたいへんであるが、そのぶん当日を迎えた後得るものはかけがえのない一生のモノになるはずだ。自分も模擬国連を通じて多くのいろいろなものをもらった。自分にとってあまりに大きな経験や繋がりだ。これからは、その恩を世界に伝えていけるように努力していくらと思う。



Global Classrooms

平 勇輝

香川誠陵高等学校 3年

模擬国連という活動を初めて知ったのは、第4回全日本高校模擬国連大会の応募締切日を目前に控えた9月初旬頃。今思い返せば、本当に運命的な出会いだった。

地元の香川県高松市に本部事務局を置くNPO法人が去年の夏に主催した、カンボジアでのスタディーツアーに参加し終わって、人生初の発展途上国訪問の余韻に入り浸っていた私は、机の上に積み重なっていた全く手をつけていない夏休みの課題をよそに、ふとインターネットで国連カンボジア暫定統治機構について調べ始めた。というのも、カンボジア滞在中に何度か耳にした、カンボジアで国連が行ってきたPKO活動についてふと興味を抱いたからだ。世界各国が参加したこのミッションには、なんと日本の陸上自衛隊も参加していたのだが、陸自としては初（自衛隊全体としても2度目）のPKOだったこともあり、その注目度は日本国内においても非常に高かった。陸自をはじめとする世界各国から派遣された部隊は、主に内戦後のカンボジアの復興任務にあたり、随所に埋設された地雷の撤去や破壊された道路や橋などの建設作業をした。カンボジア滞在中には、当時陸自に所属し、実際に地雷撤去任務にあたっていた高山良二氏（現JMAS・日本地雷処理を支援する会代表）にお会いすることができ、生々しくも貴重な体験談を耳にすることができた。そんなこともあって、私はカンボジアで実施された数々のPKO活動の中でも、特に地雷処理問題を強い関心を抱いていたのだ。

ここまで私の文章を読んでいて、勘が鋭い人ならもう気付いたかもしれない。2年前に開かれた第3回全日本高校模擬国連大会の議題は、「地雷問題の解決に向けた包括的対策」について。ネットで、国連と地雷問題に関して調べをすすめているうちに、幸運なことにも、私が運命的な素晴らしい出会いを果たしたウェブサイトこそがグローバル・クラスルーム日本委員会のページだったのだ。

それからは、まるで何かに取り憑かれたかのように急いで準備を始めた。何かよくわからないが、すごく面白そうな大会が東京で行われる、参加入してみたらすごくいい経験ができそうだと思った。当然のことだが、その時はまさか自分が日本代表団として派遣されることになろうとは予想もして

いなかった。なにを隠そう、私は模擬国連といものが具体的にどういう活動なのかということを知らないかったのだから。

全日本大会当日は、プロシージャマニュアルを見ながらの参加。議長が小槌をコンコンと叩いたときに広がった会場の張り詰めた空気や会場の机の上に置かれていた参加校のリストに並ぶ日本を代表する超進学校の数々を目にしたときの圧倒感は今でも忘れない。異様な雰囲気に居心地の悪さを感じたのだが、せっかく東京まで来たのだから何か動議(Motion)の1つでも出そうと思い、勇気を振り絞ってプラカードを挙げた。“Czech Republic would like to move for a twenty minute un-moderated caucus...”マニュアル通りの文言だったが、言い終わったあの高揚感はものすごかった。それからというもの、困ったときにはすぐにマニュアルに頼るといういかにも負けないチェコ大使を演じていたのだが、周囲の優秀で親切な仲間たちに支えられ、DR未提出という大失敗をも乗り越えて、結果的には国際大会行きのチケットをパートナーと共に手にすることできた。

ここまでできたら言い訳もできないし、愚痴をこぼすのも情けない。国際大会に日本代表として派遣してもらえる以上、模擬国連初心者という隠れ蓑を纏って現実から逃れるという選択肢はなかった。唯一、私にできることは、他の4校の代表選出者に負けないくらい国際大会にむけた準備をして、悔いの残らないようにすることだけだった。東京から香川に戻っている最中に新幹線の中でこんなことを考えていた私は、既に自分のなかで、単なる学校の代表者としてではなく、日本代表の一員としての意識が芽生えていたのだと思う。

その日からほぼ毎日、模擬国連そのもの学び始め、全日本大会でうまく使いこなせていなかった動議や会議の流れなどを勉強した。新聞の社会欄や国際欄にも目を通すようになり、少しずつだが確実に、模擬国連をする上で必要となる知識を身に付けていくことができた。

月日は流れ、いつの間にか国際大会を1ヶ月後に控えた4月。校内でも自分たちがNYに行くことになったことが話題となり、友人や先生から信頼も激励の言葉を頂いた。その月の24日には、東京でインフォメーション・セッションが開かれた国際大会での議題である「妊産婦の健康問題」に関するプレゼンテーションをした。いよいよ準備も詰めの段階。毎晩、寝る前に模擬国連関連の

Global Classrooms

ウェブページをのぞいては、一人悦に浸っていた。模擬国連の国際大会に出場できる、これだけでもこの上ない幸せなのだが、開会式前に私たち派遣団を待っていたのは思わぬサプライズだった。それは、国連事務総長潘基文氏を謁見する機会を得たこと。丁寧な日本語で東日本大震災について「一日でも早く復興できるように、みんなで力を合わせて頑張ってください。国連も世界も応援しています。」と激励してくださった。事務総長が模擬国連参加者と個別に面会することは異例のことと、私は一生に一度きりに違いないこの貴重な経験に言葉では言い表せないほどの感動を覚えた。

その後、遅れながらも開会式に参加し、改めて模擬国連活動の壮大さを身に染みて感じた。国連総会を直接目にしたときの感じたことは、恐らく実際に現地に行った人しかわからないだろう。広々とした空間に、金色に輝く国連のマーク、そして周囲を見渡すと2000名を超える世界各国からの参加者たち。自分はその1人として、今ここにいる、そう思うと嬉しくて仕方がなかった。その日は開会式だけで終わり、次の日から2日間の日程で始まる会議に備えて最終調整をした。その日までに集めたマテリアルを見直し、スピーチ原稿も読み直した。高鳴る胸を抑えながら明日に備えて十分な睡眠をとった。

翌日は、集合時間よりも1時間もはやく到着してしまったが、既に数名の参加者がその場に集まっていた。中国出身の参加者の流暢な英語、イタリア人参加者の少しなまりの入った英語、もちろん英語だけでなく、スペイン語やイタリア語など少し聞きなれない言葉も飛び交っていた。他の参加者との会話を楽しんでいるうちに時間があつという間に過ぎてしまい、会場に入った。

私が担当した議題は"Maternal Health"(妊産婦の健康問題)だ。これは、"Millennium Development Goals" (ミレニアム開発目標)にも取り上げられるほど、世界各国が必死になって取り組んでいる問題だ。医療施設の建設や医薬品等の配布など、簡単に思いつく解決策はどれも費用のかかるものばかりで、それらは基本的なインフラでさえ整っていないアフリカ諸国などでは実現可能性が低くなってしまう。この妊産婦の健康問題が抱える大きな問題の1つとしてよく挙げられるのは、状況が特に悪い国が特定の地域に集中してしまっていることだ。妊産婦の健康問題は、アメリカ大陸やヨーロッパ、極東アジアなどでは特に問題になっていない。アフリカや南アジアな

どの国々は、前述の"Millennium Development Goals"が採択された2000年時点の状況よりもさらに悪化しており、妊産婦を取り巻く環境は日に日に悪くなっている。

そんな中で、今大会で自分の担当国となったモンテネグロは、自分が予想していたよりもはるかに国内状況がよかつたため、私はかねてよりモンテネグロ国内よりもアフリカ諸国などの国外に目を向けるよう方針を固めていた。そして、モンテネグロの国はであるEUへの加盟実現に向けた大きな1歩を踏み出すためにも、特にアフリカ諸国における妊産婦の健康問題の解決に尽力することにしたのだ。とはいっても、小国であるモンテネグロに他国に医療施設を建設するほどの経済的余裕はないので、比較的オーソドックスな援助活動の実施が現実味を帯びていなかった。そこで思いついたのが、日本独自のものである「母子健康手帳」の配布だった。日本がはじめた母子健康手帳には、妊娠してから出産・子育ての各過程において、よくあるトラブルの解決法や赤ちゃんが受けた予防接種等の記録をするページが盛り込まれており、これらを配布することで、妊婦や赤ちゃんの健康をサポートすることができる。母子健康手帳の配布は、かなり効果的で、短期間で状況を改善するには最適な方法であったばかりか、配布にかかるコストは非常に安く抑えられ、これらに加えて、手帳を配布することで現地の人々を教育することもできるなど、数々のメリットがあった。大会当日も、私は母子健康手帳の配布を公式スピーチで提案するなど各国に呼びかけ、結果的に多くのDRで似たような提案がなされた。母子健康手帳自体のシステムは非常にシンプルで説明しやすかったため、周囲の理解も得やすかったのだ。

とはいものの、全てが上手くいったわけではなかった。国際大会の公用語である英語は、当然ながら私にとって、そして他の派遣団の多くの人々にとっても、セカンダリーランゲージであって、母国語ではない。全日本大会のときのように日本語が使えない分、意図したとおり相手に伝わるよう心がけなければならなかつた。母国語で話せないために、相手に100伝えたいことがあったとしても場合によっては10しか伝えられないし（ひどい時には1も伝えられない）、またそういう事情をできるだけ早く理解して、同じことでも繰り返し説明することが求められた。2日間の会議を通して、何度も言語の壁を感じたが、それでも後悔しないようにと積極的に周囲と意思の

Global Classrooms

疎通を図ろうとしたのはよかったです。

模擬国連活動は、本当にいろんなことに気づかせてくれた。ある特定の事柄について調べることの手間、論理的で説得力のある文章の書くことの難しさ、実用的な英語力の重要性、相手とのコミュニケーションの仕方。おそらく、どれも日本で普通に高校生活を送るなかではなかなか気づかないことやそれほど重要視しないことだと思う。そういった意味では、模擬国連活動に参加したことで非常に新鮮な視野を持つことができ、本当に良い経験になった。1週間程のアメリカ派遣を通して、素晴らしい仲間たちとの絆も深まり、考えていた以上のものを得ることができたと思う。

初参加の地方校出身者として、今回の海外派遣はまるで夢のような日々であったが、ここで得た経験をこのまま無駄にしてしまわないように、これから的人生に活かしていきたい。

いつしか自分がグローバル・クラスルーム日本委員会の一員となって、この素晴らしい活動を支えられるような日がくることを心から祈って。

笹原 恵奈

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

激戦の全日本大会を終え、私たちは学校の代表ではなく、国の代表として世界大会に出場することになった。全日本大会に出場が決まってから大会当日まで模擬国連一色の生活をしていた私は、ここで終わってしまうものだと思っていたが、もう一度その生活を送ることが出来ることになった。

全日本大会の安保理改革という議題で私はロシアの大使として会議に望んだ。主張がはっきりとしている上、常任理事国なので会議の中で重要な国のひとつであった。これが逆にプレッシャーに感じられるときもあったが、めげずに会議の準備を行うことができた。リサーチでは何から何まですべてを知り尽くそうと思い毎日調べ続けた。それが結果として自分の主張の裏づけや自信を持って発言をすることにつながり、ロシア大使として会議を全うすることができた。

全日本大会で一番印象に残ったのがこのリサーチの重要さだった。高校一年のときから模擬国連を始め、最初は会議で交渉を行ったり発言をしたりする上で、なかなか思うように行かないことが多かった。これの原因にはリサーチ不足があると私は強く感じていた。勿論すべての練習会議のために完璧にリサーチをすることは時間がなく、難しかったがそのたびに改めてリサーチの大切さを実感することができた。全日本大会に出場するに当たって、リサーチをすることによって付く自信そして会議全体を通して交渉の次にリサーチが面白いと思えるようになった。

世界大会派遣が決まり、私はわくわくしたと同時にさまざまな不安を抱いた。自分の英語が世界に出たときどこまで通用するのだろうか。世界大会のためにはいったいどのような会議準備をしていったらいいのか。また、大使の数が136という大きな会議に出場するのは初めてで、一カ国の主張がどこまで届くのか想像がつかなかった。しかし今回、全日本大会と決定的に違うことは日本代表の中で一校以外は同じ国を担当するということだ。初めて模擬国連がダブルスの個人戦から団体戦に変わった。

私と相方の松浦はモンテネグロ大使としてUnited Nations Forum on Forestsに参加した。議題は”Sustainable Forest Management in the 21st Century”。今年が国際森林年だったこ



Global Classrooms

とから設置された会議だと思うが、正直最初は議題が抽象的過ぎるのではないかと思う一方、どこまで深めていけるか楽しみだったりもした。しかし担当国については全日本大会と違って未知の挑戦になりそうだった。今まで出場したなどの会議にモンテネグロという国は登場したことが無かったうえ、リサーチを始める前に知っていたことはセルビア・モンテネグロから数年前に独立したヨーロッパの国だということだけ。バイアスが何もかかっていない状態でリサーチを始められるということはあったが、新しい国だと今までの活動や世界の中での立場が小さいというハンデがあるので?とも感じた。

他校の派遣生とこれを機にモンテネグロ語を勉強してみるなどと冗談を言いながらリサーチをしていたが、やはりモンテネグロ大使として何を主張したいかということがなかなか決められなかつた。歴史が浅い上に活動記録が少ない。だが、大使としての権限を持っている以上私たちにはモンテネグロの主張を探すのではなく、考えるという責任があるのだと初めてここで感じた。これに気づいたのは会議間近だったが、そこから会議戦略を考えることができた。

会議に参加して、正直に言うと想像以上の無秩序状態だった。全日本大会よりも初心者の数が多く、リサーチの量ややる気はばらばらで戸惑うことが多かった。さらに会議全体の中でどの大使がどのような動きをしているかを把握することが難しかつた。しかし自分が不安に感じていた英語力やコミュニケーションの面では問題は感じなく、強気で会議に臨むことができた。

最終的に私たちのDRは否決されてしまい、結果として残るものは何も無かつた。しかしその代わりに感じたことや得たものはたくさんあった。世界中から高校生が集まっている会議では自分が当然だと思っていることが当然ではないこと。色々な価値観をみんなが持っていて、少なからずそれが会議に出てしまっていること。世界に比べると日本人の会議はやはり白熱しながらも冷静に行われていたこと。書き始めると終わらない気がするが本当にいろんなものを感じることができた。今までに経験したことのないタイプの会議を経験することで自分の会議戦略の幅が広がったり、海外に行くこと自体で自分のものの見方を見直すことが出来たりした。

今回の派遣で体験したことは二度と体験することが出来ない貴重なものとなった。今後の自分にどのように影響するかはまだわからないが、自分の財産になったことは確かだ。今回私たちの派遣をこのようなものにしてくださったことにこの場を借りて改めて感謝したい。そして何より、ここまで一緒にやってきた相方に感謝したい。



Global Classrooms

松浦 礼

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

模擬国連と本当の国連の一番の違いは、「模擬」であること。模擬国連をやる価値は、現実的な縛りにとらわれ過ぎずに、自由な発想でより良い解決法を求めるところにある。そんな根本的な考えを、私たちは忘れてしまっていた。国際大会で何を求められているのかを見極められず、ひたすら「現実的」な自分たちの案を推し続けた。

国際大会には世界中から高校生が集まる。そのため、様々な価値観があり、衝突することも少なくないだろう。それでも互いの価値観の違いを理解し、相手に伝わるように説明でき、納得させることのできる人はいる。そのような人こそが、眞の「国際人」ではないだろうか。

全日本大会の時点では、私は全く違うことを気っていた。とにかくリサーチ不足。パートナーの笹原は全日本に向けしっかり他国の分までリサーチをしたもの、私はほとんど自国のリサーチしかしていなかった。パートナーとの意思疎通、話し合いを常に行っていたためどうにか自信を持って主張をすることができたが、更に大使の数が多い国際大会ではそのような余裕はないだろうと思った。特に、全日本大会の議題「安保理改革」と違い、国際大会の議題は「21世紀における森林計画」で、国ごとの立場がはっきりしていないため、リサーチが今まで以上に必要だと痛切に感じた。

更に英語が苦手な私は、moderate caucusで決議案の説明をする時に頭が真っ白になり、まともな発言ができなかった。このままでは、国際大会では何もできず、悔しい気持ちが残るだけになってしまう。

これらの反省点をしっかりと改善し、高校模擬国連生活を華々しく終わらせよう！と決心した。

「モンテネグロは小国だから、相手にされないのでは」や「リサーチ量が足りないので」等と心配していたが、それらは問題なかった。また心配していたコミュニケーション力も、全く問題はなかった。全日本大会での問題点は改善されたが、まったく気づいていない大きな問題点があった。それは、私たちが会議の雰囲気に合わせられなかつたことだ。

結局私の高校模擬国連生活は「華々しく」は終われなかった。だが、国際大会は、私にとって模擬

国連の意義を再確認する場であったと共に、国際人であるために何が必要か教えてくれた、有意義なものであった。

日本人は「机上の空論」と言われるような実現性の薄い、頭の中だけで考えられた方法論をよしとしないが、アメリカ人は自分たちの力でどうにかしようという意志を持ち、現実離れしながらも改革的な、もしも成功したら世界がより良くなるような提案をする。どちらが良いとは言い難いが、価値観の違いがあることは明らかだ。未来の派遣生もそれを理解した上で、また模擬国連特有の夢と希望を持ち、国際大会に挑んでほしい。



Global Classrooms

井上 博斗

灘高等学校 3年

"Montenegro"

"Yes, present."

議長の声が議場に響き渡る。頭で考えるより先に体が反応した。プラカードを持った右手を高く掲げたその刹那、私はモンテネグロの人になっていた。ついに始まった。議長による各国大使の出欠確認がすすむ中、私はざわつく心を落ちさせた。目を閉じると、半年前の光景が自分の頭の中にまざまざとよみがえった……。

昨年の11月、私は途方に暮れていた。全日本大会において、取り返しのつかないような失敗を犯してしまったのだ。これまで自分がやってきたことは何だったのだろう。前年も全日本大会に参加していたのに、自分はその中で何を学んでいたのだろう。一日目の夜、私は自己嫌悪にさえ陥っていた。だからこそ、次の日に自分が選ばれたときの驚きは今でも忘れられない。ただ、私はこの時決議案を書くことができなかつた。それは、この2日間の「結果」を何一つ残せなかつたということであり、すなわち自分がその会議に存在していてもいなくても一緒だつたということを意味していた。そして私には新たな課題が突きつけられた。今までできなかつたことを、次こそやらねばならなかつた。

数か月後、私は全日本大会とは全く違つたアプローチで模擬国連に臨んでいた。今まで考えられなかつたようなリサーチの量。担当国の人団や宗教といったデータから、国連決議や国連機関によるレポートといった専門文書まで、少しでも役に立つと思われたものはすべてチェックした。会議中他の国々がどのように動くのか、綿密なシミュレーションも行った。何より力をいれたのは、自分の参加する会議がどのような問題についての話なのか、自分の担当国がその問題に対してどのような立場をとっているのか正確に理解するということ。今から思えば当たり前のようなことではあるが、そういった基本的な考え方でさえ自分にとっては画期的だった。

2011年5月、ニューヨーク。自分に与えられた、最高の舞台。一日目の会議は、東欧約20

か国による小規模なものだった。私は序盤からどんどん仕掛けていくことにした。会議の空気を読むくらいなら最初から作つてやれ。そんな気持ちだった。そして序盤戦、自分のプラン通りに事が運ぶ。非公式討議におけるUnmoderated Caucusを使った自由な交渉こそ認められなかつたものの、スピーカーズリストに一番初めに名前を載せることもできたし、Moderated Caucusの中で担当国の立場をはつきり表明することもできた。極めつきはスピーチを制限時間きつかりに終わらせることができたことだった。制限時間を知らせる木槌の音と共に、参加者の口からため息がもれ、やがてそれが拍手にかわつていった。数か月間の準備の末、私はついに担当国利益と国際社会の利益のどちらも考え、うまく両立させていくような気がしていた。そして会議の流れは確実に自分たちに有利な方に傾いていった。

その時、私はたぶん油断していたのだろう。あまりにうまく行き過ぎていた。Moderated Caucusをもう一つ挟んで、会議の内容を自分たちの望む方向にうまくフォーカスさせようとしたとき、もろくもその秩序は崩れ去つた。議長裁量——まさかこんなところに障害が、それも決して越えられない壁ができることになろうとは。

"We are not going to focus on a specific problem, but going to focus on many problems"

議長の言葉を聞いたとき、頭の中が一瞬真っ白になつた。それから後のこととはあまりよく覚えていない。ただ議場がひたすら混沌とした状態になつていつた。

午後になってやつと、自分のやるべきことを思い出した。自分の通りにならないなら、周りの作った枠組みの中で担当国利益を追求するということを。そのためには周りとの衝突も辞さなかつた。決議案中の一言一句までこだわつた。そのかいあって、一日目の終わりには何ぞか、担当国主張を盛り込んだ決議案を作成することができた。

一日目の夜、私は二日目に向けた準備をしていた。もう全日本大会の時のあの戸惑いはなかつた。自分のプランがつぶれるという決定的な

Global Classrooms

ハンデを抱えていたのにもかかわらず、なぜか明るく、そして希望に満ち溢れていた。

ほとんど寝ることもなく迎えた二日目。圧巻だった。一日目にそれぞれの地域別に分かれて行った会議の中で出たアイデアや決議案を携えて、150 をこえる国々の大使が大きなホールの一堂に会した。出欠をとるだけで 10 分以上かかる。発言するのも一苦労。無数に並んだプラカードの中から、何としても選ばれなければならない。私はとにかく圧倒されていた。何百人という高校生のもつ強烈なエネルギーがビリビリと伝わってきた。一人一人のベクトルの向きは全然違っていたのに、最後には皆が納得する、創造力に満ち満ちた、素晴らしい決議が仕上がった。そして万雷の拍手とともに、エキサイティングで、ちょっぴりほろ苦い、私の高校生活最後の模擬国連は、幕を閉じた。

——私は夢をみていたのだろうか。結局日本に帰ってきてからは、またいつもと何も変わらない日常があった。ニューヨークでの一週間は単なる幻想だったのだろうか。そう思ったことも一度や二度ではなかった。だが私は今でも、あの瞬間をはっきりと覚えている。自分が最後の一言を発すると同時に振り下ろされる木槌。乾いた音が鳴り響き、そして、一瞬の静寂。割れんばかりの大きな拍手がわきあがるまでのあの一瞬、私は、確かに「世界」の真ん中にいた。

存在するということ——それは不安定で儚い。幻のような一週間が夢でも幻想でもなかったこと、自分があの場にいたということ。それを証明できるのは自分自身だ。あの会議に自分がいたことの意義、自分にとってのあの一週間の存在意義が生まれるかどうかは、これから自分の次第ではないだろうか。私は今回、今の自分ができること、逆にできないこと、そしてやらなければならぬことをはっきり認識することができた。私は感じている、あの 2 日間の非日常がいつの間にか自分の日常を変えてしまうだろうことを。私は信じている、ニューヨークで自分に新たに与えられた課題をこなせば、必ずや自分がもっと成長できるであろうことを。さあ、新たな一歩、より大きな一歩を踏み出そう。自分にやれることを一つ一つこなしていこう。いつの日か、私が自分にしかできないことを成し遂げることを、自分という存在が本当の世界の真ん中にいることを信じて……。



Global Classrooms

永田 徹

灘高等学校 3年

グローバル化が進む中、世間では毎日のように日本人の閉鎖性が指摘され、英語の必要性が強調されている。確かにこれから時代を生き抜くためには英語をしゃべることが大前提になってくるに違いない。しかし、いくらネイティブのような英語力を持っていたとしても、それを以てして伝える中身が自分の中になれば何の意味もなさない。言葉に書いてしまうと月並みのことだが、今回の国際模擬国連においてそのことを痛感した。

初めての模擬国連だった全日本大会では自国の主張を真剣に戦わせている人々の姿を目の当たりにし、全てが新鮮で楽しく、刺激を受け、かけがえのない経験をすることができた。そして翌年の5月に開催される国際大会への切符までも手に入れた。日本の大会でさえもこんなに楽しいのだから世界中から高校生が集まる国際大会はどれほどエキサイティングなものになるのだろうというわくわくの反面、帰国子女でもなんでもない僕は英語という「大前提」を操れないという強烈な不安も抱いていた。

国際大会までの準備期間、英語という問題にとらわれた僕は、国連に関するテクニカルな準備というよりもどちらかというと英語の習得の方に重きを置いていた。最終的には、たとえ片言でも必死で自分の伝えたいことを言おうとすればみんな聞いてくれるだろうしなんとかなるだろうという開き直った気持ちでアメリカに向かい、会議に臨んだ。

なんとかならなかった。二日間ある会議の一日目は全く発言できず、二日目はまだましだったものの個人的にもチーム的にも活躍といった状態からは程遠かった。もちろん決定的な英語力不足も原因のひとつではある。しかしそれだけではない。僕達のチームが参加した会議の議題はスポーツを平和のためにどのように利用するかというものだったが、僕たちはスポーツがあまりにもさまざまな国際問題に対応出来すぎるためにかえってその方向性を決められないことがこの議題の解決を遅らせている原因だと考え、解決すべき問題をひとつにしほるという提案を

準備していた。しかしその考えは一つの問題にフォーカスすることはしないという議長の裁量によって、提案することさえできずに一日目の最初に破棄されてしまった。一つの問題にフォーカスするという前提の上で会議の流れを自分たちの方に持っていくと考えていたのに、それをつぶされてしまってはもう僕達がすることは残っていない。そのあとの非公式討議で僕は片言で何かを伝えようとしているが、それができなかつた。伝える中身がないのだから当然といえば当然だ。そしてその時初めて気がついた。重要なのは自分が伝えたいことがあるかないかであって、言葉をしゃべれる・しゃべれないは次の次だということだ。

もっと事前準備をして自分のいいたいことをためておけば対応できたかもしれないという後悔はある。しかし、世界中の高校生と議論しこのような後悔をもつことすらなかなかできることではない。そして、模擬国連をとおして得た仲間、刺激、どれをとっても本当に素晴らしい体験だった。あとはこれらの経験を自分の成長の糧とできたら国際大会で何も発言できなかつたことも無意味ではなくなると思う。

最後に、これから模擬国連をはじめる人には英語ができないからといって尻込みしないでほしい。まずは自分の考えが重要なのだ。最初の一歩を踏み出せば、計り知れない経験を得ることができる。



Global Classrooms

支援協力団体一覧

本派遣事業の実施にあたり多くの団体からご支援とご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。

(以下五十音順、敬称略)

後援

外務省

文部科学省

国際連合広報センター

日本国際連合協会

国際連合大学

協賛

メリルリンチ日本証券

会計報告

本派遣事業は、メリルリンチ日本証券により賄われました。ご支援いただき心より感謝申し上げます。

収入

メリルリンチ日本証券 寄付	3,770,000
合計	3,770,000

支出

渡航費	2,150,000
宿泊費	920,000
交通費	100,000
会議費他	600,000
合計	3,770,000

2011年6月14日
グローバル・クラスルーム日本委員会

Global Classrooms



「グローバル・クラスルーム：ジャパン」の皆さん、お疲れ様でした。

改めて言うまでもありませんが、皆さんはこの今回で第12回目を数える UNA-USA のグローバル・クラスルーム高校模擬国連国際大会に「日本代表」として参加をしました。そして、会議中の皆さんのパフォーマンスはそう呼ぶに相応しい立派なものでした。その意味で皆さんには、過去の日本代表たちの伝統をしっかりと受け継いでくれました。大変嬉しく思うと同時に、心から感謝します。

今回のチームは自分たちが「日本代表」であることを再認識する場面に特に多く遭遇したのではないかと思います。

もちろん会議中皆さんは担当国である UK/モンテネグロを代表したのですが、24カ国から集まった2,500人の参加者のなかでたった10人しかいない日本代表チームです。わが国が大変な困難に直面し国際的な注目を集めている今般にあっては、日本を語る機会も多々あったのではないでしょうか。そして、そうした場面において、「日本代表」として言葉を発する難しさを感じたのではないかと思います。

「次世代の国際人/グローバルなリーダーを育成する」とことが、グローバル・クラスルームの究極の目的です。「世界の中の UK/モンテネグロ」、「世界の中の日本」、さらには「世界の中の自分」を考えることは、その目的を実現するにおいて欠かすことのできない大切な要素です。また、このプログラムには、それら以外にも皆さんを次のステージへと導く様々な経験が用意されています。

人によって考えたことは様々でしょう。「経験だ」と感じる事象もそれぞれで異なるかもしれません。

それでいいのです。もう一度この一週間を振り返って、その中で自分が学んだと思うことすべてを記憶に留めておいてください。

そして、また何年か経ってこの一週間を振り返ったとき、ここで自分が変わったと思ってもらえるのならば、本プログラムを支援したものとしてこれほど嬉しいことはありません。

最後に、今回の派遣事業を様々な形で支えてくださった関係各位には改めて御礼申し上げます。おかげさまで、今回も成功のうちに事業を終えることができました。

メリルリンチ日本証券

バンク・オブ・アメリカは世界最大の金融機関の一つであり、個人、中小企業および大企業を顧客とし、銀行業務、投資業務、資産運用業務、その他の金融およびリスク管理のための商品やサービスを幅広く提供しています。バンク・オブ・アメリカは現在、バンクオブアメリカ・メリルリンチというグローバル・ブランドの下、投資銀行業務および金融市場業務を開拓しています。

メリルリンチ日本証券は、バンクオブアメリカ・メリルリンチの日本における法人顧客事業の拠点として、事業会社、金融機関、政府機関など広範な法人顧客を対象に株式・債券のトレーディングを行い、資本市場業務、投資銀行業務、その他のアドバイザリー・サービスを提供しています。

メリルリンチ日本証券はグローバル・クラスルームの日本における創設メンバーであり、2007年の活動開始以来、高校生の模擬国連活動を支援しています。

Global Classrooms

グローバル・クラス ルーム日本委員会

(以下順不同、敬称略)
アドバイザリー・ボード

明石 康

(財団法人国際文化会館理事長／元国連事務次長
／日本国際連合協会副会長)

小林 いずみ

(世界銀行グループ 多数国間投資保証機関
(MIGA) 長官)

評議会**星野 俊也 (議長)**

(日本模擬国連創設者・OB／大阪大学 大学院公共政策研究科長／元・国連日本政府代表部公使参考官)

紀谷 昌彦

(日本模擬国連 OB／防衛省地方協力局提供施設課長)

中満 泉

(日本模擬国連 OG／国際連合平和維持活動局政策・評価・訓練部長)

ジェイソン・ケンディ

(メリルリンチ日本証券広報部長)

野田 司

(メリルリンチ日本証券広報部シニア ヴァイス
プレジデント)

柿岡 俊一

(埼玉県立浦和第一女子高等学校 教諭)

竹林 和彦

(渋谷教育学園渋谷高等学校 教諭)

米山 宏

(公文国際学園中等部・高等部 教諭)

杉村 詠史 (理事長)

(グローバル・クラスルーム日本委員会理事長／
青山学院大学教育人間科学部教育学科 3 年)

高橋 淳志 (研究担当)

(グローバル・クラスルーム日本委員会理事／早
稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 3 年)

高橋 祥子

(2007 年国際大会派遣生／慶應義塾大学法学部
法律学科 3 年)

山田 沙織

(2008 年国際大会派遣生／慶應義塾大学法学部
政治学科 2 年)

馬場 潤子

(2009 年国際大会派遣生／一橋大学社会部
2 年)

理事会**杉村 詠史 (理事長)**

(青山学院大学教育人間科学部教育学科 3 年)

高橋 淳志 (研究担当)

(早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 3
年)

大内 悠路

(慶應義塾大学経済学部経済学科 2 年)

渡部 智

(東京大学教養学部文科 I 類 2 年)

小檜山 歩

(国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科
4 年／2010 年度理事長)

元橋 一輝

(東京大学法学部第 2 類 4 年／2010 年度研究担
当)

事務局連絡先

E-mail: info@jcgc.jp

Global Classrooms

おわりに

国連とは国際社会の縮図です。それは、世界192の加盟国による最も普遍的な議論の場であり、その議論は人類全体の行く末を左右しかねないものなのです。国連での会議外交では、各国の国益が激しく対立する場面が多々あります。外交とは単なる国益のぶつかり合いではありません。各国は自らの国益を見極めながらも、同時に国際社会全体の共通利益を探り、一国では解決不能の諸問題に共同で対処していく、複雑でかつ創造的・建設的なプロセスが繰り広げられなければなりません。こうしたプロセスが必要な物は、相手を言い負かすためのロジックではなく、議題となる問題への深い知識や洞察、高度の判断力・交渉力そしてコミュニケーション能力などです。模擬国連は、知識とスキルをもとに、立場や考えを異にする人々の間で、積極的な国際協力を実現するための合意形成を進めるエクササイズとして、とても有益なものです。

今回日本から参加した若い「大使」たちは、ニューヨークにおいて本物の国連を間近に実感しながら、潘基文国連事務総長に謁見できする機会にも恵まれ、教科書では学ぶことのできない多くのことを体験して、これから学びと研鑽の糧を得て帰国しました。

私たちの暮らす世界は、恐ろしいほどのスピードで変革しています。既存の考え方になるとわざらず、創造的に、ダイナミックに課題に取り組み、世界の人々と協力し、またリーダーシップを発揮できる人材を日本からも数多く出す必要があります。私たちは、ニューヨークでの模擬国連会議に高校生を派遣する事業を、そのための小さな、しかし重要な活動のひとつと位置づけています。参加高校生が持ち帰る経験は、国連という限られた場のみならず、広く外交、ビジネス、研究などの場で有益なものであると確信しています。

米国国連協会からのご厚意とメリルリンチ日本証券のご支援により、少数の有志によるグローバル・クラスルーム日本委員会が始めた高校生の日本代表団派遣支援事業は今回で5回目と

なりました。今回も代表団にご参加くださった各校のトップを含む教職員各位、保護者の皆様、そして生徒さんたちご自身がそれぞれ責任ある姿勢と冷静なご判断を胸に行動し、何ら問題なく派遣事業を終えられ、さらに優秀な業績を残してこられたことを私たち評議員は、心からの感謝と感激の思いで受け止めました。ありがとうございました。

また、毎回の派遣事業には大学生の全国組織である日本模擬国連による運営が不可欠ですが、杉村理事長以下、代表団のためとなるよう誠実かつ効果的に準備に取り組んでくださったことに改めて厚く御礼を申し上げたいと思います。昨年度から運営に加わった、過去の日本代表団のOBOGからなるOBOG会もいかんなくその経験を本事業に提供してくれ、当団体の益々の繁栄が期待されます。さらに、本事業への支援をお続けくださっている協賛/後援諸団体には感謝の言葉もございません。私たちとしては、多くの皆様のご支援とご期待を励みとし、グローバル・クラスルーム事業の更なる発展に一層の努力をしていく所存です。どうぞ今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会
評議会 議長 星野 俊也

Global Classrooms

参考

関連リンク

米国国連協会／UNA-USA
<http://www.unausa.org/>

グローバル・クラスルーム／
 Global Classrooms©
<http://www.unausa.org/globalclassrooms>

2011年国際高校模擬国連大会／
 12th Annual global Classrooms International
 Model UN Conference
<http://www.unausa.org/unausamun>

グローバル・クラスルーム日本委員会／
 Japan Committee for Global Classrooms
<http://jmun.org/gc/>

メリルリンチ日本証券／
 Merrill Lynch Japan Securities
<http://www.japan.ml.com/>

関連報道

共同通信
 「潘氏「一日も早い復興を」 高校生に日本語で激励」 5/13

東奥日報、山陰中央新報、四国新聞、高知新聞、佐賀新聞等が上記記事をウェブ・紙面等で報道

時事通信
 「日本の高校生、支援に感謝＝大震災で国連総長に」 5/13

朝日新聞
 「潘・国連総長を表敬「震災支援感謝」 日本の高校生」 5/13

日本経済新聞

「「国連も世界も応援」、日本の高校生と事務総長面会」 5/13

読売新聞

「〔世界からエール〕高校生に事務総長「国連も応援」」 5/14

毎日新聞

「国際高校模擬国連大会：被災日本を激励 潘国連事務総長、訪米高校生と面会」 5/14

また、NHK 国際放送、日本テレビ系列、TBS 系列がウェブで上記内容をテレビ報道

日本代表団の国連事務総長表敬訪問時の動画
<http://www.youtube.com/user/UnicTokyo?feature=mhee#p/u/0/0Rv1jHtnNic>

共同通信

「模擬国連、東京の麻布高が優秀賞 日本は3年連続受賞」 5/15

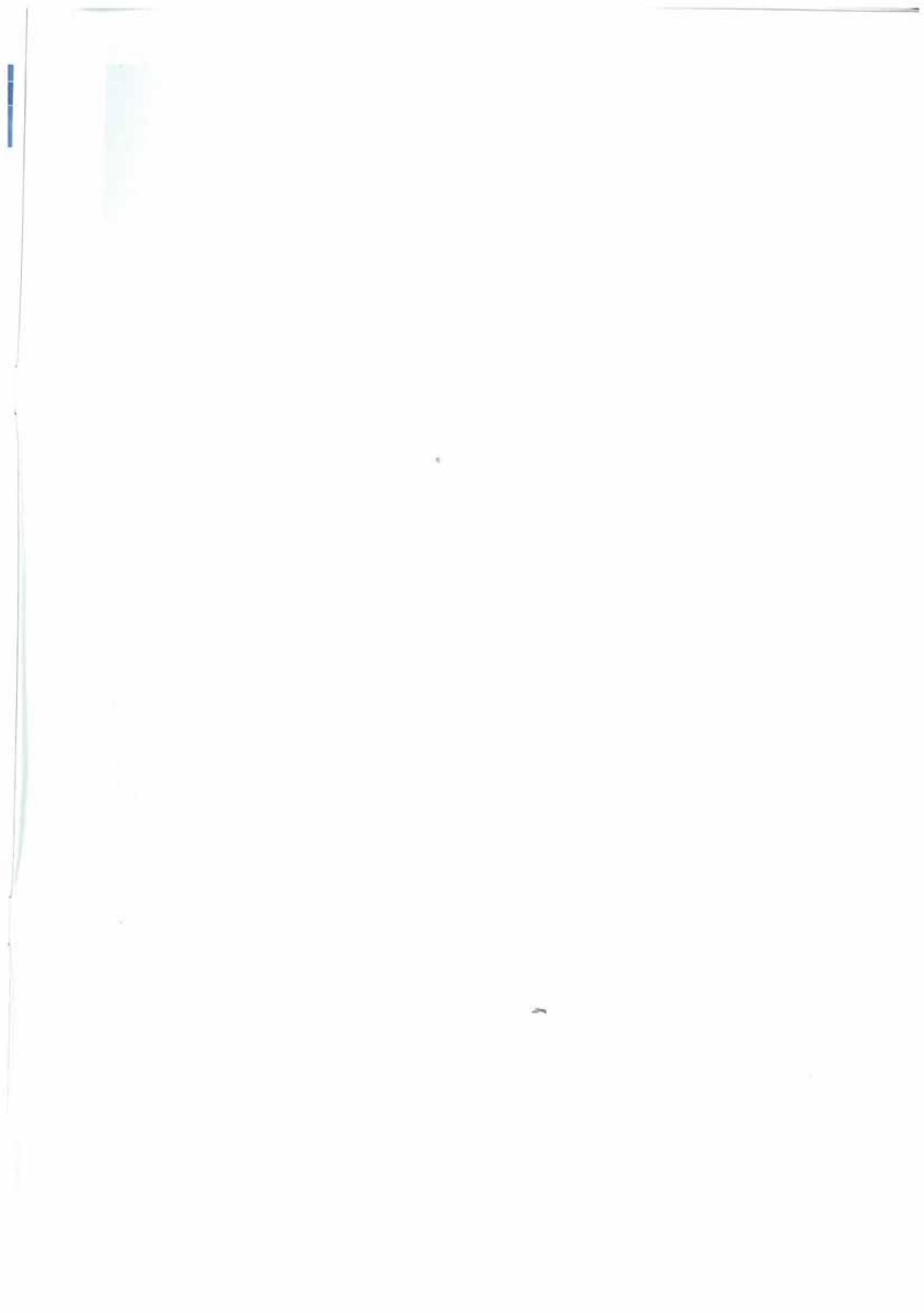
日本経済新聞、産経新聞、朝日新聞、北海道新聞、東奥日報、秋田魁新聞、岩手日報、山形新聞、福島民報、福島民友、茨城新聞、下野新聞、千葉日報、神奈川新聞、北日本新聞、北國新聞、福井新聞、岐阜新聞、静岡新聞、京都新聞、大阪日日新聞、日本海新聞、山陰中央新聞、中国新聞、山陽新聞、徳島新聞、四国新聞、高知新聞、西日本新聞、佐賀新聞、熊本日日新聞、長崎新聞、大分合同新聞、宮崎日日新聞、沖縄タイムス等が上記記事をウェブ・紙面等で報道

Global Classrooms

<MEMO>

Global Classrooms

<MEMO>





グローバル・クラスルーム日本委員会
Japan Committee for Global Classrooms